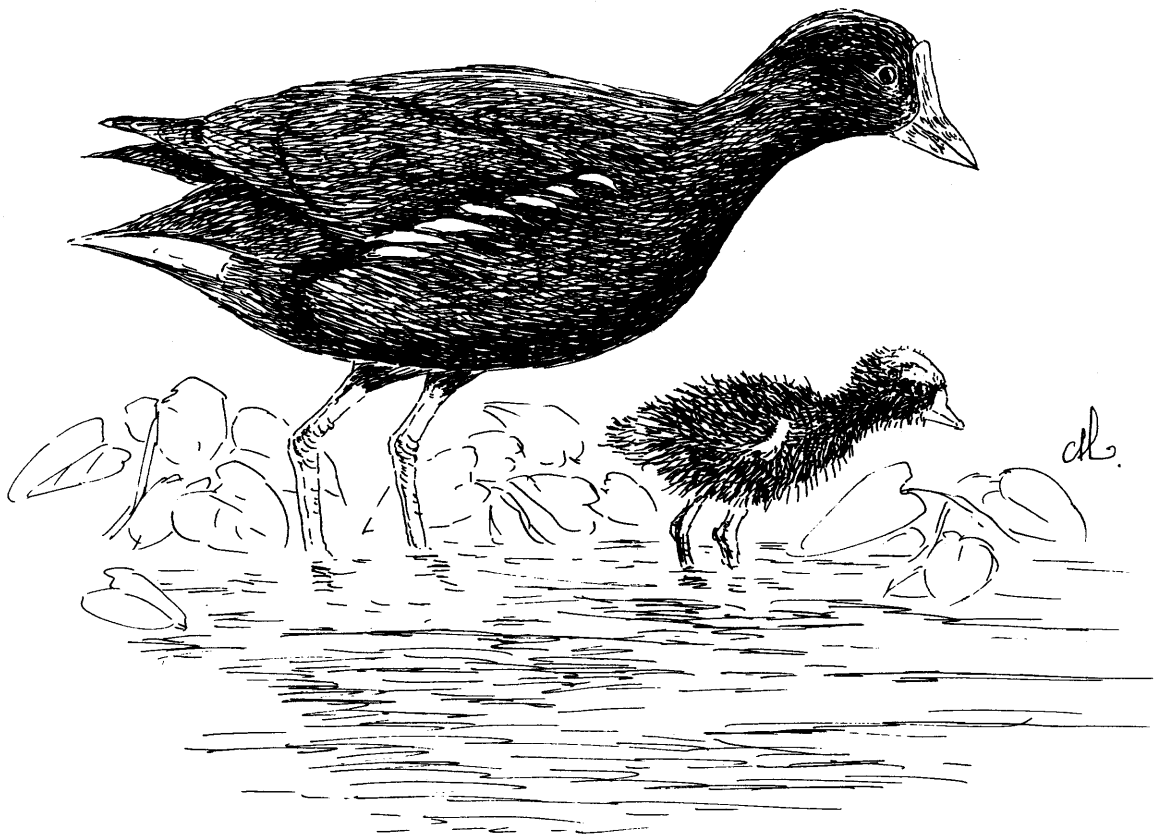


しづとん

第51号

特集：失われた湿地とその回復



2006年7月

日本野鳥の会 三重県支部

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>



特集にあたって

編集部

今回は「失われた湿地とその回復」と題して、三重県下の失われた湿地、海岸、干潟について調べてみました。また三重大学の高山先生にアメリカ合衆国西海岸での湿地回復の動きについて書いていただき、さらに昨年2005年の木曾岬干拓地のチュウヒ繁殖調査の結果を掲載しました。日本ではまだ湿地回復の動きどころか、湿地や沼地はいらない土地として、埋め立てられることがしばしばです。三重県でも失われた湿地回復の動きが始まるとよいのですが。

三重県の失われた湿地、海岸、干潟

平井正志(津市 安濃町)

かつて伊勢湾岸には自然の砂浜や干潟が広がっていた。それが今日、数えるほどしか残っていない。その失われた湿地を拾って見るのもあながち意味の無いことではあるまい。明治末期から大正初期に発行された五万分の1地図をもとに湿地の変遷をたどってみた。

木曾三川河口：木曾川、揖斐川、長良川は江戸時代から河口部の干拓、新田開発がさかんに行われた地帯であった。干拓地は小規模な堤防で

目次

表紙の言葉..... 2

特集：失われた湿地とその回復

 特集によせて.....2

 三重県の失われた湿地、海岸、干潟.....2

 木曾岬干拓地の持続可能な利用の
 ありかたを考える..... 5

 木曾岬干拓地における2005年の
 チュウヒ繁殖とねぐら調査結果.....10

アートギャラリー.....14

支部活動のページ

 三重県支部総会.....15

 理事会報告.....19

 支部活動の記録..... 19

今日も鳥日和.....21

野鳥記録.....22

探鳥会報告.....23

編集後記.....26



チュウサギ

表紙の言葉

バンの親子

コナギのびっしり生えた休耕田でバンの親子を見つけた。この鳥は容易に外敵が近づけない浅い水面に草を盛り上げて巣を作る。画一的な水田整理や水辺をコンクリートで固める河川改修でかなり数が減ったようである。しかし、米があまり、休耕田が増えて、その片隅でほそぼそと繁殖している。(平井正志)



囲まれた水田はかなりの湿地であったろう。また堤防と河道は複雑に入り組み、しばしば氾濫を繰り返してきた。江戸時代から大規模な堤防工事、河道の変更などが行われてきた。中でも宝暦の治水工事は有名であった。明治に入ってからヨーロッパの治水工事の技術が取り入れられ、現在の三川の河道が定まった。それとともに大規模な堤防で陸地と川あるいは海が仕切られた。それでも河道には砂州や、干潟があった。また員弁川河口には広い干潟があった（大正6年発行地図）。

その後、愛知県側では鍋田干拓地や名古屋港周辺で大規模な工場用地の埋め立てが続き、自然にあった干潟は全く消滅した。県境にわずかに残っていた木曾川左岸の干潟はかつてハマグリ産地であったという。しかし、ここも農業用地として堤防が作られ、排水し、陸地となった。それ以降、農業用地としては使われず、放置され、現在ではチュウヒが繁殖する木曾崎干拓地となった。これもこの2006年春から北側に盛り土をして、運動公園に換えようとする事業が始まっている。木曾岬干拓地については「しろちどり」41号（2003年12月に詳しい）。

また員弁川と揖斐川に挟まれた河口も砂浜と干潟が広がっていた。これも明治以降に干拓され農地になった。

四日市周辺：安藤広重の描いた浮世絵東海道五十三次の「四日市」では茫々と広がる葦原をたどる街道の様子が描かれている。当時は東海道の街道のあたりまで葦原が広がっていたのかもしれない。大正6年に発行された地図によると現在の四日市駅付近のごく一部と東海道沿いをのぞいて、水田が広がっていた。海岸の堤防は四日市港（現在のJR四日市駅に1kmほど東）とその南の塩浜付近にあるだけで、海辺のほとんどが堤防もない砂浜であったようだ。現在の中部電力川越発電所があるあたりは広大な砂浜と干潟であった。それ以南には干潟は少なかったようだが、鈴鹿川と派川河口には広い砂浜が描かれている。おそらく、多くのシロチドリが繁殖していたことであろう。高度成長期に水田は工場に変わり、干潟は次々と埋め立てられ、石油コンビナート用地に変えられた。砂浜

海岸はコンクリート護岸になり、自然海岸は朝明川河口の高松海岸と磯津港の奥の吉崎海岸のみになってしまった。四日市周辺は伊勢湾西岸で最も激しく湿地と自然海岸が失われた地域であろう。

白子、河芸、白塚、津付近：大正2年の地図で見ると白子付近と千里付近には砂浜の背後に水面が描かれている。おそらく砂の堆積によって自然にできた池（海跡湖）で、なにかに利用されていたのだろう。千里付近のものは現在も田中川左岸に養魚池の跡地として残り、カワウの繁殖地となっている。田中川河口には両岸に干潟があった。しかし、左岸の干潟は近年になってから野鳥の会の反対にもかかわらず、ヨットハーバー建設で埋め立てられてしまった。幸い、右岸の干潟は現在も残されている。

それ以南の海岸は砂浜海岸で、後背地の水田もあまり多くなかったようだ。おそらく葦原が広がっていたことであろう。田中川河口から安濃川河口までは現在でも自然海岸がのこされている。現在では津市街になっている安濃川河口やそれ以南も贅崎の小さな港を除いて雲出村まで水田、芦原、砂浜が続いていたようだ。現在では護岸が施され、一部を除いて海岸の奥行きはごく狭く、ウミガメの産卵やシロチドリの抱卵には適さない。古老の話ではシロチドリのヒナを捕まえてきて遊んだとかウミガメの背に



イカル



特集：失われた湿地とその回復

乗って遊んだとかいう。それほど豊富にシロチドリやウミガメがいたのであろう。

五主海岸付近：旧三雲町の五主海岸、香良洲海岸はおどろいたことに明治44年の地図と現在でほとんど変わらない。当時から遠浅の干潟が広がっていたようで、江戸時代から盛んに堤防を築き、内陸を干し上げる新田開発が行われていたようだ。曾原新田、喜多村新田の名は当時も同じであり、堤防の位置も同じである。五主池は現在より大きい、その当時も堤防内の池であった。ただ、五主集落の周辺や雲出川、古川分岐の右岸など、堤防の背後にさうとう湿地、芦原がのこっていたようだ。それでも干潟と堤防の背後の水田、湿地が現在まで保存されている唯一の例であろう。現在でも多くのシギ・チドリが飛来する。櫛田川河口には当時から干潟が広がっていた。金剛川、愛宕川の左岸は埋め立てられ、現在松阪港とセントラル硝子の用地になっている。また右岸、櫛田川との間は干潟であったか現在は浄化センターになっている。近年になって松阪港沖をさらに埋め立てる人工島の計画が浮上したが、いつの間にか立ち消えになったようである。

伊勢朝熊山の山麓：五十鈴川と五十鈴派川が分かれるあたり、及び派川の流域には水田と湿地があった。また山裾にも水田があった。その周辺の鳥については橋本太郎氏が調査している。ヤマシギを始め多くのシギ類が採集され、ヒメクイナも記録されている。記録の一部は発行されているが、大部分はまだノートの形でこのさされているのだろう（しろちどり第46号2005年3月）。

1990年代には山間の水田は放棄され、葦原や一部にはハンノキが入りこんでいた。その中の一部がその水田や湿地も世界祝祭博覧会の用地として白羽の矢が立てられた。オオタカやヒバリシギなど貴重な鳥類も記録されている。またシュスランの群生地も見つかった。当時の三重野鳥の会はこの生態系の保護を訴えたが、開発は進められ、1994年博覧会が開かれた。その跡地は近年公園とサンアリーナに変わってしまった。

このように見ていくと伊勢湾岸の干潟、浅瀬はほとんどが埋め立てられ、工場用地になってしまった。海岸は護岸され、現在自然海岸と言える場所はわずかである。以前は農業用地として干拓され、その後高度成長期には工場用地として奪われた。そして注目すべきはその後レジャーの用地として湿地が奪われたことである。田中川河口左岸の干潟や伊勢市、朝熊山麓の湿地、はその例である。今また木曾岬干拓地も同じレジャー用地として奪われつつある。今回は調べきれなかったが、七里御浜周辺の湿地、内陸伊賀の池や沼、湿地などで失われた場所は相当多いと考えられる。別の機会に調べ、まとめたい。湿地回復の動きを願って。

謝辞：伊勢市、吉居瑞穂さんからは世界祝祭博覧会用地についての貴重な情報をいただきました。ここに感謝いたします。



モチツツジ



木曾岬干拓地の持続可能な利用のありかたを考える

高山 進(三重大学)

筆者は3月に三重県環境影響評価条例に基づく「準備書」意見書を提出し、その後行われた聴聞会で意見を述べた。聴聞会の場で同じく意見を述べた野鳥の会の方々と知り合い、その後現地調査を同行させて頂いた。それと同時に2002年と2005年にアメリカにおける類似のケースを見学し、日本にはない力強い塩水湿地再生の歩みに触れることができた。日米のケースを対照させることで、多少とも木曾岬干拓地の利用問題というこの国のケースの将来展望に寄与できることがあればと思い、本稿を記す。

1. 木曾岬干拓地の事例

かつて木曾三川河口に広大な干潟があり、当該地はその約3分の1を占めていたと言われる。1966年に農地に転換する目的で国直轄の干拓事業が行われ、73年に堤防で閉め切れ排水された。しかし、農地への強い期待は薄れ、長い間放置されていた。97年に木曾岬干拓地土地利用検討委員会が設置され、2年間の検討の後、99年に「当面は現状の地盤高で利用し、将来的には盛土等を前提とした高度な形での都市的な土地利用に発展させる」とする報告書をまとめた。

現在進行している木曾岬干拓地整備事業はこの報告書に立脚して、三重、愛知両県によって進められている。

この1999年は、ちょうど「干潟の価値」をめぐる政策の転換を象徴する藤前干潟の開発ストップの年であった。「公害防止・環境保全に資する」廃棄物処理場ならば沿岸域の埋め立てOKという、当時としては先例踏襲的な政策を粛々と進めていた名古屋市にとって、その裁定は不本意なものであったと思われる。しかし、その時期を境として、「自然再生」「生態系管理」の大きな流れが始まり、「新・生物多様性国家戦略」や「自然再生法」の中で、まず「保全」、次いで「再生」の優先順位も確認された。「自然再生基本方針」においては、「自然環境が損なわれた地域において、損なわれた自然環境を取り戻す行為としての『再生』」が強く奨励された。

このように、開発と環境をめぐる政策の枠組み、価値の比重がいわば根本から変化している現時点において、木曾岬干拓地の整備問題はどのような合意形成方法をとるべきなのだろうか。通常は従来の利害調整方法を引き継ぎ、現在まで知り得たことの延長で政策が決められるが、このように価値観や条件が大きく変化する際には、むしろ新しい枠組みの中でめざすべき目標をしっかりと定め、広く合意し、目標の方向を向いた意思決定が行われるべきであろう。実は前

木曾岬関連年表

	木曾岬の動き	政策の変化
1959	チュウヒの繁殖始まる	
1966	木曾岬干拓地事業着手(国直轄地として)	
1969	三重、愛知間の県境問題発生	
1973	干拓地を堤防で囲み、排水	
1994	三重、愛知の県境合意	環境基本計画
1997	木曾岬干拓地土地利用検討委員会設置	環境影響評価法
1999	木曾岬干拓地土地利用検討委員会報告書提出	藤前干潟埋め立て事業中止
2000	農業目的としての事業を中止	環境基本計画改定
2001	環境影響評価方法書縦覧(11/1~12/17)	三重県伊勢湾再生ビジョン
2002	野鳥の会他鳥類調査報告	新・生物多様性国家戦略
2003		自然再生基本方針
2005	環境影響評価準備書縦覧(1/24~3/17)	



特集：失われた湿地とその回復

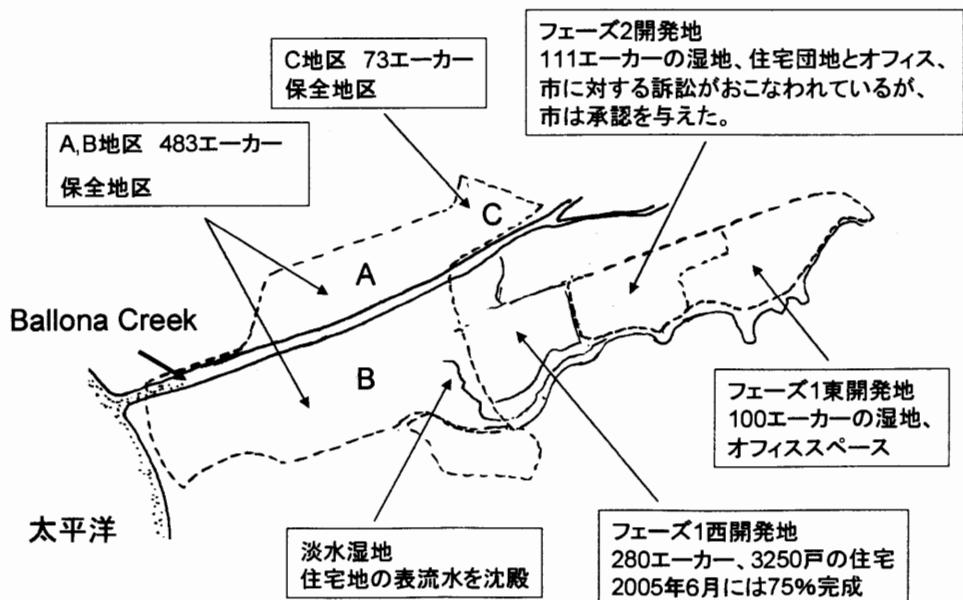
者の意思決定方法をフォアキャスト方式と言い、後者の意思決定方法をバックキャスト方式と言う。「持続可能な社会」や「循環型社会」を模索すべき今日の政策決定はバックキャスト型でなければならないと言われている。

木曾岬問題の場合、新しい枠組みの中でめざすべき目標とは何であろうか。それは、チュウヒの「保全」とともに、かつてこの地が干潟であり、盛り土をすることによって潜在的な干潟の状態が失われ、「再生」の条件が消失する、という点も直視したものであるだろう。今回の環境影響評価では「及ぶおそれのある影響」はチュウヒ問題に限定されたが、こうした「もう一つの影響」を考慮すべきではなかったのだろうか。以上の考察から、筆者は設定すべき目標は次のようになると思う。

- ① 干拓地はもともと干潟であり、伊勢湾のゆたかな生物生産力と浄化能力を支えていた場所である。この地に盛り土をすることは「潜在的な干潟」を破壊することに他ならず、この環境影響を直視するべきである。そしてこの行為に対する代償は、干拓地を塩水湿地に戻すことである。
- ② たとえ将来北側に都市的な施設を建設するとしても適正なものとし、一定の緩衝地帯を挟み、南側にはチュウヒが現在よりもゆとりを持って生息できる生態系を強化する。
- ③ 塩水湿地の再生とチュウヒの保全を前提とした、本格的な再生計画づくりに着手すべきである。

Ballona Wetland 関連年表

1978	Friends of Ballona Wetlands 設立、以後25年以上の開発業者との争い
1993	Playa Vista 計画のフェーズ1がロスアンジェルス市によって承認された。
1994	市民団体との間で270エーカー(108ha)以外の開発を認める協約あり。The Ballona Wetlands Land Trust 結成。
1996 - 99	環境団体による三つの訴訟が進行。国家環境政策法、クリーンウォーター法、絶滅の危機にある種の法の三つを駆使
2000	フェーズ1建設開始、開発業者団地脇の淡水湿地造成開始(52エーカー、21ha)
2002	陸軍工兵隊双方向ゲート建設(2002.12-2003.2)
2003	10月二つの州法、193エーカー(77ha)の買い取り決定。価格1億4千万ドル。
2004	フェーズ2計画がロスアンジェルス市によって承認





2. アメリカにおける2つの事例

筆者は2002年6月にサンフランシスコ湾の調査を行った際に、いったん閉めきった土地であるBair Islandを再生する計画が進んでいることを地元の市民活動家からうかがった。また、2005年3月に同様のケースと思われるロスアンゼルス近郊のBallona Wetlandで、いったん海から切り離された淡水湿地を塩水湿地に再生する様子を見学し、地元の市民団体Friends of Ballona Wetland、陸軍工兵隊その他から話をうかがった。アメリカでこうした事例がどの程度普遍性を持っているかを確認してはいるが、これら2つのケースに沿って塩水湿地を粘り強く再生しようとするアメリカの2事例を紹介する。

(1) Ballona Wetland

面積は1087エーカー(435ヘクタール)で木曾岬とほぼ同じ広さである。かつてこの地は広大な塩水湿地だったが、1940年代に治水目的で作られたBallona Creekによって海水の流入はなくなり、湧水により淡水湿地となった。

その後の経過を年表を用いて概観しよう。この土地を所有し、金融資本からも強力に後押しされたPlaya Vistaがこの地に高級マンションを建設する計画を持ち、93年になってロスアンゼルス市から計画のフェーズ1が承認された。70年代後半からこの地の保全活動を行っていた市民側は土地購入を意図する団体The Ballona Wetlands Land Trustを立ち上げた。96年からNEPAに定められた環境アセスメント要件や水質浄化法404条をめぐる湿地保全の要件、絶滅のおそれのある種の法をめぐる要件等をめぐって訴訟が行われたが、いずれも保全側の敗訴という結果になった。その結果、2000年にフェーズ1建設が開始され、団地の表流水を沈殿させる淡水湿地の造成が行われた。

この時点で湿地保全の可能性が消失したかに見えるのだが、2002年暮れから陸軍工兵隊によって、

Ballona Creek 堤防に満潮時の海水の流入を制限する調節装置がついた双方向ゲートが建設され始めた。この「管理された塩水湿地化」のきっかけは97年にロスアンゼルス市が陸軍工兵隊に話を持ちかけたと言うことであり、さっそくその年から陸軍工兵隊が調査を開始したという。法的にはThe Water Resources Development Act (1986年改訂)に立脚し、改訂法で水資源開発に生態系保全を加えたとのことであった。これによって淡水湿地から塩水湿地へと湿地の性格が大きく変わることになった。そして翌年10月、カリフォルニア州による裁断が下され、A区画の193エーカー(77ヘクタール)を1億4千万ドルという金額で買い取った。

裁判の結果にかかわらず、州や市によって独自の決断が下された以上の展開を見ると、アメリカ社会の地方分権の強さが読みとれるし、公共事業の担い手である陸軍工兵隊にも生態系保全の流れを組み込む柔軟性を見ることができる。また、市民、地方行政、中央省庁の連携で、かつて塩水湿地であったこの地の特性を活かす合意が取り付けられたことに注目したい。

ツクバネウツギ





特集：失われた湿地とその回復

(1) Bair Island

サンフランシスコ湾南部に面するこの地は3000エーカー(1200ヘクタール)を超える面積を持ち、19世紀後半から農地に変えられ、1946年から塩田会社が所有しMiddle BairとOuter Bairの一部を土手で囲い塩田化していたが、現在は旧塩田は堤防が自然に壊れ、時々塩水が入る湿地となっている。Inner Bairは乾陸化し、Outerの多くの部分は伝統的な塩水湿地Tidal Salt Marshを形成している。

1973年、Mobil Oil土地開発が土地を購入し隣接するRedwood Shoreでの都市開発を進めた。82年にはMobil Oil土地開発はBair Islandの開発計画を申請し、Redwood Cityが承認を与えたが、住民投票では圧倒的に保全の投票が上回った。89年には熊谷組がこの土地を購入し、都市開発をめざした。ここでサンフランシスコ半島の景観、生態系保全のために、土地の永久保全をめざすNPO、Peninsula Open Space Trust (POST) が動き、97年には資金調達し1500万ドルで購入に成功した。POSTは1977年発足以来55,000エーカーの(22000ヘクタール)土地を永久保全してきたという。

POSTが集めた資金は次のものであった。

資金源①：400万ドル←州機関、California Transportation Commission

資金源②：350万ドル←連邦機関、Federal Land and Water Conservation Fund

資金源③：150万ドル←議会

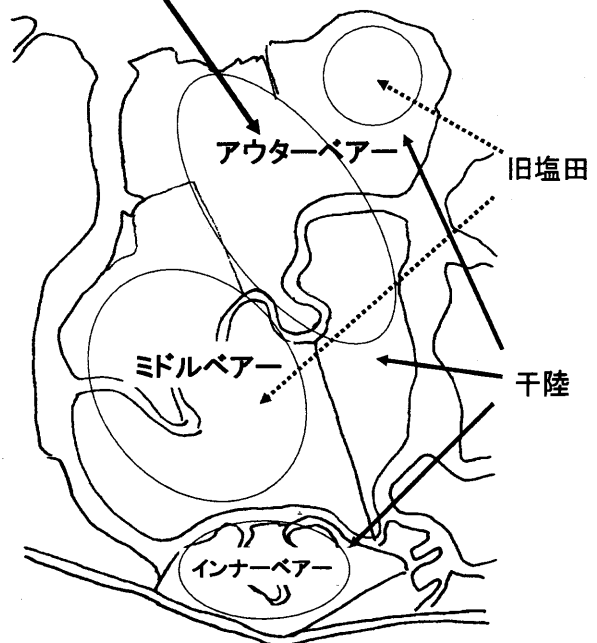
資金源④：110万ドル←カリフォルニア州

資金源⑤：500万ドル←個人の寄付(約5000人)
計 1510万ドル

2004年1月29日にはMiddle BairとInner Bairの部分に関して437ページに上る再生管理計画がまとめられ、同年8月には環境影響評価書がまとめられた。再生計画の主導機関はこの地の自然保護区管理に携わっているThe Don Edwards San Francisco Bay National Wildlife Refugeで、生態系保全を管轄する中央省庁であるThe U.S. Fish and Wildlife Serviceの下部機関である。再生計画の担当者にメールで問い合わせたところによると、この地を塩水湿地に戻すための合意形成をDon Edwardsが中心になり、連邦機関、地方政府、企業、市民の間で粘り強く行ってきたという。

1973	Mobil Oil土地開発が塩田会社からBair Islandを購入、隣接のRedwood Shoreの開発を推進。
1982	Mobil Oil土地開発がBair Island開発計画、Redwood City承認。住民投票は圧倒的大差で保全側勝利。
1989	熊谷組がRedwood ShoreとBair Islandを入手、Bair Islandの開発を発表。
1997	Peninsula Open Space Trust (POST, 1977結成のNPO) が資金調達し1500万ドルで購入に成功(カリフォルニア州、連邦1千万ドル、市民募金500万ドル)。
2004	1月再生管理計画、8月環境影響評価書

塩性湿地(Tidal Salt Marsh) サンフランシスコ湾





3. Bair Island 再生計画

2004年1月に湿地再生計画が発表された(BAIR ISLAND RESTORATION AND MANAGEMENT PLAN)。作成者は州組織のSan Francisco Bay Wildlife Societyと連邦組織のU.S. Fish and Wildlife Serviceとなっている。

主な目標は三つあり、一つは、塩水湿地(tidal salt marsh)を回復させること。第二に、絶滅危惧種(とりわけCalifornia Clapper Rail(注1)とsalt marsh harvest mouse(注2))と他の原生動植物のための生息地を提供すること、第三に、レクリエーションや自然学習の機会を提供することによってBair Islandのユニークな資源に対する一般の認識を高めることである。なお、計画の実行期間は50年間という長期間を想定している。計画では5つの案を提案し、そのメリット、デメリットを考察しながら一つの案を推奨している。一つ目は「何もしない案」(No Action Plan)であるが、堤防が自然に壊れるのを待つために、目標とする塩水湿地の回復量が最も少ない。この案は思考実験として提供しているにすぎず、現実的な意味を持っているわけではない。一方、次の4つの案を現実的な案として比較検討している。A~D案はMiddle BairとOuter Bairを旧塩田の土手に切れ目を入れて塩水湿地に戻し、Inner BairについてはA、B案は塩水湿地(Tidal Salt Marsh)に戻し、C、D案は堤防で囲った形で一部塩水湿地に戻す(Diked Salt Marsh)というものである。A、B案は干陸化しやや低くなった土地に適切に浚渫土を入れ、C、D案は浚渫土を入れず堤防を切った水門に導入海水量コントロールの装置をつける。一方、A、C案とB、D案は人の侵入規制という点で区別され、A、C案では人の出入りを比較的緩やかにし、B、D案は厳しく制限する案である。

このような選択肢の広がりを与えた上で、本計画が推奨しているのはA案である。その理由は、次の通りである。A案はインナーベアの盛り土(数cm)をするので、C、D案より高くつくが、将来的には目標とする塩

水湿地(Tidal Salt Marsh)が最終的にもっとも拡大する。一方、A案は遊歩道の長さ、ボートのアクセス、という点で、様子を見ながらではあるが、ある程度認める方針をとっている。

Bair Island 再生計画に関する 4つの案

代替案	アウターとミドル	インナー	侵入規制
A	Tidal Salt Marshに戻す	Tidal Salt Marshに戻す	規制は比較的ゆるい
B	Tidal Salt Marshに戻す	Tidal Salt Marshに戻す	規制は厳しい
C	Tidal Salt Marshに戻す	Diked Salt Marshを作る	規制は比較的ゆるい
D	Tidal Salt Marshに戻す	Diked Salt Marshを作る	規制は厳しい

三重大学生物資源学部4年川地未希子氏作成

こうして、かつてこの地に広がっていた典型的な沿岸域の風景である塩水湿地(Tidal Salt Marsh)が最終的には最も広く再生され、かつ、可能な限り自然とふれあえる人のアクセスも模索したいという案としてA案が提出されている。計画が50年という長い時間になっているのは、自然からのレスポンスをじっくり見極める順応的(Adaptive)なプロセスであることを示唆している。

4. アメリカの2事例からの教訓

アメリカにおいてもかつて塩水湿地であった場所を再生する課題は、幾多の困難を経ながらごく最近になって実現しつつある課題であることが読みとれる。生態系保全がかつてより重視される時代に合わせて、柔軟に省庁、行政側も変わろうとしている姿が伝わる。木曾岬のケースはいまだに、超開発志向の99年報告書が「バイブル」とされ変化の気配が感じ取れない。そこには木曾岬干拓地は知多半島から伊勢湾を横切って南から縦に乗り入れる「高規格道路」の適地と記述されている。そして国土交通省の「新道路整備五箇年計画」(1998年閣議決定)には確かにその高規格道路は記述されており、いまだに撤回はされていない。本整備事業の事業主体(三重県、愛知県)が述べる「チュウヒの



保全」とどう折り合いをつけるのか、説明は不可能である。

この姿は「長期ビジョンが不鮮明のまま現状追認する」フォアキャスト型政策決定の典型的な姿である。アメリカの場合は州、市、連邦省庁、陸軍工兵隊に至るまで、かつてあった塩水湿地の再生が、社会が共有する目標として合意されている。Ballona Wetlandにおいて開発と保全を約半分ずつ棲み分け、水門を通じて管理的に塩水を導入している。一方、Bair Islandは、将来いっさい水門管理せずに塩水湿地化する取り組みをめざしている。木曾岬の場合、管理的な塩水導入とチュウヒ保全は十分両立していくように思われるが、これ自体たいへん挑戦的な課題であり、科学的な研究に基づく本格的な再生計画なしには実現できない。

アメリカの2事例の場合は、民間の業者が所有する土地を買い取ってまでして行政のビジョン転換を示した。一方、木曾岬はすでに行政が取得している。行政は公共的立場、総合的判断が求められる主体として、「持続可能な社会像」を具体的事例において率先して指し示すという今日的な責任を果たすべきである。

(編集部注)

注1) The California clapper rail (*Rallus longirostris obsoletus*) クイナの一種

30-45 cmほど 合衆国絶滅危惧種

注2) カリフォルニアのサンフランシスコ湾周辺の塩水湿地にすむ小さなネズミ、合衆国絶滅危惧種、生活をアカザ科の塩水植物pickleweed (*Salicornia virginica*) に依存している。

木曾岬干拓地における2005年のチュウヒ繁殖とねぐら調査結果

日本野鳥の会三重県支部

日本野鳥の会愛知県支部

名古屋鳥類調査会

この報告は2006年3月26日に行われた木曾岬フォーラムでの報告書から主要部分を抜粋し、加筆したものである。

はじめに

2006年になり木曾岬干拓地環境整備事業が始まり、干拓地北部の埋め立てが行われつつある。三重県から出された環境影響評価書では、チュウヒが繁殖し、多くの希少な鳥類が生息していることが述べられている。しかし、事業が行われたとしても、影響は少ないか、代償措置で軽減できるとしている。しかし、環境影響評価が行われた多くの事業でも、しばらくするとそこには今までいた生物がいなくなってしまうことがよくある。その例が阿知須干拓地である。チュウヒがかつて繁殖していた干拓地に、スポーツ公園や「山口県立きらら浜自然観察公園」

などが作られたが、現在繁殖は見られない。

棲息環境を破壊することはとても易しいが、それを回復するには膨大な努力が必要である。コウノトリがそのよい例であろう。兵庫県豊岡市では、コウノトリが放鳥され、自然の中で生きていけるような環境作りが始まり、高く評価されているが、野生での恒常的な繁殖地を回復するまでにまだ長い道のりが必要であろう。今回の事業がチュウヒの繁殖個体の絶滅へつながらないように強く訴える必要がある。我々は県の計画した代償措置(ミチゲーション)が果たして機能するかどうか、チュウヒの繁殖に事業がどれほど影響を与えているか、今後も調査を継続する予定である。

ここでは、2004年11月以降、2006年2月までの調査結果について記載する。併せてこれまで4年間の調査結果と併せて考察する。

1 調査目的

日本野鳥の会三重県支部および愛知県支部と愛知県野鳥保護連絡協議会は2000年1月から干拓地内に入り調査を始めている。それ以前より、

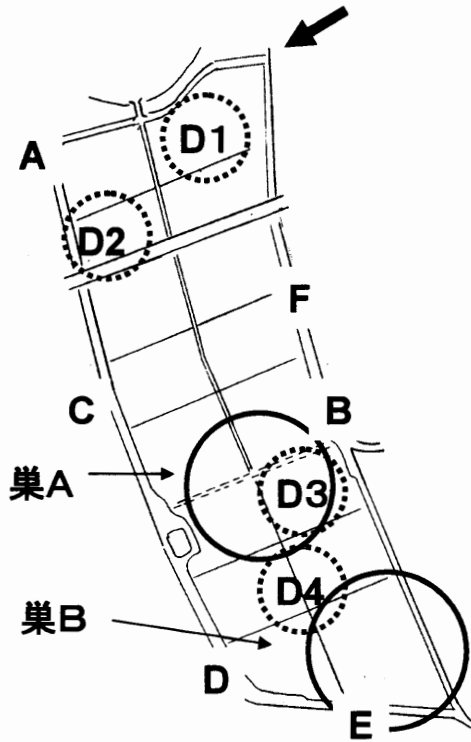


図1. 2006年の調査地点、ディスプレイ位置、巣のおおよその配置

木曾岬干拓地には絶滅の危惧されるチュウヒが繁殖していることが知られていた。また、冬季にはチュウヒ・ハイロチュウヒ・コミミズク・コチョウゲンボウ・ハヤブサ・オオタカなど希少な猛禽類がねぐらとして利用している。また、秋の渡りの時期には数千羽のショウドウツバメが渡りの途中の採餌場所やねぐらとして利用している。干拓地の埋め立てなどの改変はこれら野鳥の生息環境に大きな影響を与える懸念がある。

今回の調査は主に、猛禽類の行動や個体数などの調査を中心に行った。同じ種でも環境が異なれば、その行動は異なる。これまであまり調べられていないチュウヒの繁殖行動についても調べた。また、今後は事業の影響が懸念されるが、その基礎になるデータとして利用するために行った。

調査方法

チュウヒ等の猛禽の観察は毎月継続して行っ

ている。ここでは繁殖期である、2005年3月から2005年9月までの結果をまとめた。さらにねぐら調査として2005年12月10日夕刻に調査した。

観察の主な定点は、図1のA、B、C、D、E、Fの各点である。また、中央の道路に沿っても自動車で移動し、随時調査を行った。調査結果は調査終了後、各地点での観察をまとめ、重複を除いた観察数を算出した。従って生息数、ねぐらへの進入数の実数はこれより多い可能性がある。

1-1 2005年の繁殖期調査結果

調査では、主にチュウヒの繁殖調査を主に行った3月から9月までの結果は以下の通りである。

2005年3月17日の調査では図1の点線円D1-D4の4地点でディスプレイが見られ、4つがい繁殖を始めようとしていた。そのうち、D1地点でのつがいは若鳥であった。

4月16日の調査では干拓地南部分で：雌雄のペアによるディスプレイが5回観察された。また、高速道路北側の干拓地でもチュウヒの飛行が4回観察された。高速道路北側で3月17日にディスプレイが見られた地点では繁殖行動がみられなかった。5月21日の調査では、ディスプレイは2回だけであったが、ハンティングをする雄の姿が何度も確認された。また、餌を運ぶのも確認でき、繁殖が始まったと推定された。巣のおおよその位置は図1に実線の円A、Bで示す（円の中心がかならずしも巣の位置ではない）。6月の調査では巣A付近で巣から出たと思われる雌が、雄から餌をもらうのが観察された。また、巣B付近でも雌雄による餌渡し、確認され、2カ所で抱卵あるいは育雛しているであろうと推定された。

7月16日の調査では、南側の巣Bの近くで、2羽の幼鳥が観察された。B地点付近での巣A付近での幼鳥は確認できず、繁殖が成功したかどうかは不明である。巣A付近ではその後8月および9月の観察でも幼鳥は確認されなかった。



特集：失われた湿地とその回復

考察

2005年の繁殖では4つがい繁殖行動に入ったが、高速道路北側ではディスプレイだけに終わり、営巣に至らなかったと推定される。これはD1地点には、干拓地内に模型飛行機愛好者が作成した滑走路があり、彼らが恒常的に侵入しているものと考えられた。侵入者は、鍋田干拓地との木曾岬干拓地の境の北端から入っていた(図1右肩の矢印)。なお2002年にもD1地点で巣作りまで行ったチュウヒのつがいがあったが、そこでの繁殖は失敗している。

またB地点の北の堤防下の直線道路(干拓地を取り囲む堤防内側の道路)を模型飛行機の愛好者が利用し、滑走路として利用している。ここでは、人の身の丈以上もある大きな模型飛行機が飛ばされ、大きなエンジン音と干拓地内に大きく入って飛行している。また、干拓地内に墜落した飛行機を探すために、B地点の西側の干拓地内に侵入し、飛行機の探索を行っているのを何度も確認している。このためか、その後の調査でD3地点のチュウヒは巣を放棄したもようである。

結局抱卵あるいは育雛に至ったのは2つがい

であり、幼鳥の巣立ちが確認されたのは南端の巣Bだけであった。繁殖失敗の原因は模型飛行機の飛行とそれに伴う愛好家の度重なる進入によるものが大きいものと判断される。管理者である、三重、愛知両県の適切なる管理を望むものである。

1-2 過去4年間の繁殖

2002年から2004年にわたるチュウヒの繁殖調査結果は「木曾岬干拓地鳥類調査報告02」、「木曾岬干拓地鳥類調査03」、及び「木曾岬干拓地鳥類調査04」で報告している。

図2は、2002年からの繁殖場所の概略を示している。なお、円の精度は保護のためきわめておおまかに示してあり、円の中心と巣の位置とはかぎらない。

まず、図2からわかるように、干拓地南部の事業者が保全区を設置しようとしている場所では毎年繁殖行動が見られ、これまで4繁殖期のうち3回成功している。また、干拓地中央付近でも同じように、4繁殖期のうち3回成功している。しかし、北側では、4繁殖期で1回の成功しかなかった。特に、模型飛行機を飛ばすために侵入者が入ってくる高速道路北側では、一度も成功していない。

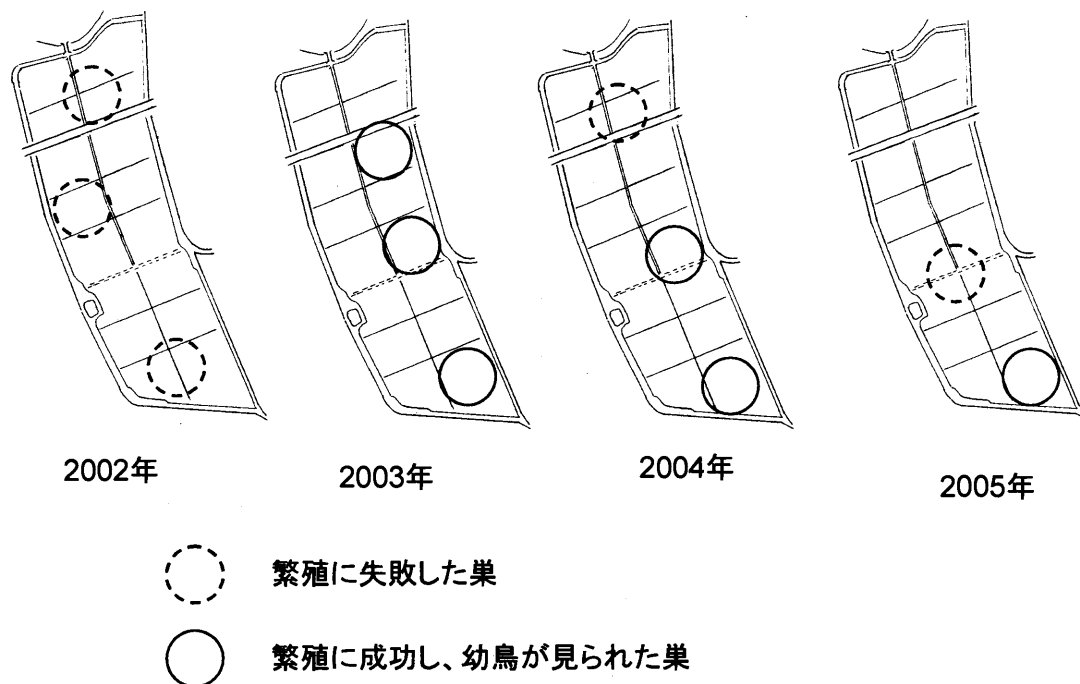


図2 2002年から2005年の繁殖



2 猛禽類個体数調査

2004年12月から2006年2月までの調査では、表1のように猛禽類が観察された。

表中の日の下に「夕」とあるのは、夕方行ったねぐら調査である。冬季を中心に13種の猛禽類が確認できた。冬季にはハイイロチュウヒと似た体色の大陸型の個体なども観察できた（写真4）2005年9月はチュウヒが1羽も観察されなかったが、それ以外の観察日には観察されている。またミサゴは年間を通して観察され、個体数も多い。このように多種の猛禽類が確認できることは、人やペットなどが入り込まないことが大きな要因で猛禽類の安住の地になっていると考えられる。

3 ねぐら調査

過去8回のねぐら調査で見られた猛禽類を表1に示す。

8回の調査では、9種類の猛禽類が観察された。2005年12月の調査ではチュウヒが22羽観察された。また、コミミズクやハイタカなどこれまでのねぐら調査では出現したことのない種も観察された。これまでの調査で当干拓地がチュウヒの恒常的なねぐらであることが明らかになった。なおコチョウゲンボウの観察個体数が2004年以降顕著に減少しているが、何に起因する減少か明らかでない。

表1. 猛禽生息数調査結果

年	2004		2005														2006	
	12		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		
日	18	18 夕	15	28 夕	19	19	16	21	18	16	20	15	15	19	10 夕	17	29	16
チュウヒ	7	16	7	14	6	8	8	3	4	6	3	0	1	4	22	9	8	8
ハイイロチュウヒ	2	2	2	2	4	5	1						1		2	1	1	
コチョウゲンボウ	3	8	4	8	5	3	4						1	1	6	1		
チョウゲンボウ							2					1	2	1		2	2	
オオタカ	1	2	2		1	1	1				1		2		2	2	2	1
ハイタカ						1	1							1	1			1
コミミズク															1			1
ノスリ	3	2	3	3	2	5	3							2	3	3	8	7
ミサゴ	10	6	5	4	8	4	4	2	2	4	7	8	6	10	7	12	8	10
ハヤブサ		1					1			1			1	1	1		1	
トビ						1			1	1		1		2		1	1	1
サシバ							1											
ハチクマ												3						

表2. 猛禽類ねぐら調査結果

調査年月日	02.02.13	02.12.07	03.01.18	03.02.15	03.12.12	04.12.18	05.01.28	05.12.10
チュウヒ	16	27	35	19	27	16	14	22
ハイイロチュウヒ	2	6	4	4	3	2	2	2
コチョウゲンボウ	4	44	25	29	22	8	8	6
オオタカ	1		1	2		2		2
ハイタカ								1
コミミズク								1
ノスリ		3	1	1	1	2	3	3
ミサゴ	3	10	9	3	4	6	4	7
ハヤブサ					1	1		1



上からシマアジ
ツクシガモ
オシドリ
撮影：久住勝司（松阪市）



2006年度日本野鳥の会三重県支部総会

まとめ：事務局

久々に風薫る五月晴れとなった5月28日（日）、2006年度日本野鳥の会三重県支部総会が、津市にある三重県総合文化センターで開催されました。出席者は38名、市川副支部長が司会進行をまとめ、はじめに杉浦支部長が挨拶しました。そのあと議長に村田理事が選出され、議事録署名人に鹿島素子氏、岡八智子氏を指名しました。

以下の項目について承認を受けました。

2005年度事業報告承認の件<保護部、研究部、企画部、編集部、事務局>

2005年度決算報告、監査報告承認の件 <事務局財務担当、監事>

2006年度役員候補承認の件 <事務局>

2006年度事業計画案承認の件 <保護部、研究部、企画部、編集部>

2006年度予算案承認の件 <事務局財務担当>

2005年度保護部活動報告

1. 行者山風力発電について

2006年1月22日保護部会で渡りのルート上にあり、大きな問題であると確認し、保護部会として反対をしていくことを確認。

各理事に「鳥羽市行者山に建設予定の大型風車（風力発電）について」を送付し、意見を求めた。特に意見はなく、同意したものと考えた。（一部理事に問題行動があり、理事会で議論した）

行者山探鳥会（2006年4月22日）オオタカなど 終了後クマタカを確認（本部より古南保護室長が参加）（朝日、読売 新聞報道有り）

環境省、経済産業省、NEDOへ事務局より反対文送付（2006年5月7日）

環境省中部事務所へ支部長・村田・平井が出向き、「建設に同意しないように」要請した。（4月27日）

青山高原の鳥類生息調査（田中）（2006年4月8日）

2. 木曾岬干拓地問題

a) 木曾岬干拓地フォーラム開催（三重県支部・愛知県支部・名古屋鳥類調査会の共催）

2006年3月26日（日）

2005年の調査報告

「未来からの政策決定」伊勢湾・三河湾流域ネットワーク高山進

今後の事業の進め方 三重県総合企画局特定政策室 桜井好基

b) チュウヒサミット（三重県支部・愛知県支部・名古屋鳥類調査会の共催）を計画

2006年6月24日（土）愛知大学車道キャンパス

基調講演 大串龍一金沢大学名誉教授 「河北潟干拓地の変遷」

全国6箇所チュウヒの繁殖地・生息地からの報告

c) チュウヒの生息・繁殖調査

3. 経ヶ峰林道

三重県山岳連盟と連絡を取って事実確認を行った。

4. 野鳥記録

情報を収集し、検討した上で「しろちどり」に掲載した。

5. 猛禽類委託調査について

中勢地区オオタカ生息調査 継続中 順調に抱卵中と思われる。

北勢地区クマタカ生息調査3月で終了。調査のまとめを日本イヌワシ研究会・山崎亨氏にみてもらった。以降支部としての自主調査として調査を継続中。

6. 野鳥生息調査

各地区で調査継続中

7. カイトボード問題

カイトボード愛好者に協力依頼をするビラを作製、配布を依頼（2006年4月5日）。



2006年度保護部活動計画

1. 行者山風力発電について： 日本野鳥の会本部とも連絡を取りながら、国立公園の中であり、サシバ・ハチクマの渡りルート上に大規模な施設が作られることに大きな問題があるため、反対運動を続ける。

保護部として、青山高原などの風力発電の影響について調べる。

2. 木曾岬干拓地問題： チュウヒの繁殖地を守るための活動を継続する。チュウヒの繁殖・生息調査を継続。

チュウヒサミットの開催（6月24日）。来年度以降も継続を検討する（開催地などは検討が必要）。木曾岬干拓地フォーラム（2007年3月予定）開催。

3. 経ヶ峰林道： 現地調査などを行い、野鳥の生息状況を調査して今後の方針を検討する。

野鳥記録： 情報を収集し、問題のない内容については「しろちどり」への掲載を続ける。

4. 猛禽類委託調査： 中勢地区オオタカ調査は継続。北勢地区クマタカ調査は委託事業としては終了したが、自主調査して継続する。

5. 野鳥生息調査： 各地での調査をまとめ、冊子にする方針。

2005年度研究部活動報告

1. 委託調査事業として以下の鳥獣保護区基礎調査を行った。（飯高町宮前鳥獣保護区・員弁東部鳥獣保護区・青山高原鳥獣保護区・ガンカモー斉調査＝調査員39名・調査地点169地点）

2. レッドデータブック三重の原稿執筆と校正： 間もなく発行の予定植物編・動物編各2800円

3. WWFシギチドリモニタリング調査： 年3シーズンの各3回以上の調査実施。

2006年度研究部活動計画

1. 委託調査： 鳥獣保護区基礎調査・ガンカモー斉調査

2. WWFシギチドリモニタリング調査： 年3シーズンの各3回以上の調査実施。

2005年度編集部活動報告

第47号（特集：三重県の里山）

第48号（特集：三重県のシギ・チドリ）

第49号（特集：三重県のため池とカモ）

第50号 50号記念号（特集：三重県における野鳥の会のあゆみ：カラー印刷）

を発行した。記念号の写真は応募が少なかった。もっと文章でも写真でも投稿してほしい。

2006年度編集部方針

年4回の発行を維持する。（7月、10月、1月、4月各初旬 発行）

51号は 総会の記事＋「失われた湿地とその回復」を特集する予定 7月1日発行

以降の号は特集未定。今後外部に投稿を依頼した場合には執筆料を出す。

年に1回くらいカラー印刷にする。写真、文章をどしどし投稿してほしい。

2005年度事務局報告

総会

2005年5月29日（日） 三重県総合文化センター（生涯学習センター）

理事会

第1回 2005年5月29日（日） 三重県総合文化センター（生涯学習センター）

第2回 2005年11月6日（日） サンワーク津

第3回 2006年3月12日（日） 津市雲出市民センター

臨時 2006年3月21日（火・祝） アスト津



2006 年度役員候補者

<理事・新任：津地区> 石原 宏（総会で承認されました）
 任期途中ですが、都合により以下3名の理事が辞任しました。
 中村みつ子、西浦克征、高橋松人

三重県支部 2005 年度 事業報告

1. 探鳥会 合計 54 回（略：探鳥会の報告はしろちどり各号を見てください）
2. 野鳥講座
 - 第1回 研修会 4月29日（日） 三重県男女共同参画センター 7名参加
 - 第2回 研修会 7月10日（日） 三重県生涯学習センター 8名参加
 - 第3回 研修会 10月30日（日） 三重県生涯学習センター 11名参加
 - 第4回 研修会 1月27日（日） 三重県生涯学習センター 27名参加
3. リーダー養成： 自然観察指導員講習会に2名派遣
4. その他： しぜん文化祭・2005年7月17日（日）～18日（月・祝） みえこどもの城（松阪）
 出展 忘年会 12月22日 錫杖湖水荘（芸濃町） 天候不良のため中止

2006年度日本野鳥の会三重県支部 年間行事計画

	北勢地区	伊賀地区	津地区	松阪地区	南勢地区	その他
4月	2(土)藤原岳 23(日)木曾岬 29(土)県民の森			8(土)ベル ファーム	22(土)行者山 30(日)早朝	9(日)研修会
5月	7(日)朝明源流 16(火)海蔵川 28(日)木曾岬	7(日)愛宕神社		20(土)美杉		14(日)案内人 養成講座 28(日)総会 特別野鳥講座
6月	25(日)木曾岬	11(日)曾爾高原	4(日)錫杖ヶ岳	18(日)鎮守 (企)		24(土)～25(日) チュウヒ・サミット
7月	23(日)木曾岬					9(日)研修会
8月	20(日)高松海岸 27(日)ツバメ 27(日)木曾岬					
9月	24(日)木曾岬 30(日)多度山		16(土)雲出川 河口		30(土)伊勢タカ	
10月	22(日)木曾岬	1(日)高見山 タカ	8(日)白塚町屋	1(日)飯高タカ	29(日)二ツ池 (企)	15(日)研修会
11月	26(日)木曾岬	26(日)伊賀市 比自岐		12(日)市木		19(日)理事会
12月	12(火)海蔵川 24(日)木曾岬		23(祝・土) 安濃ダム	3(日)阪内川	17(日)神路ダム	
1月	28(日)木曾岬	21(日)名張市 薦原			28(日)錦漁港	
2月	11(日)東山動物 18(日)木曾三川 25(日)木曾岬	25(日)島ヶ原			24(土)外城田川	18(日)研修会
3月	4(日)石垣池 20(火)海蔵川 25(日)木曾岬		4(日)借楽公園	31(土)篠田山		11(日)理事会
計	24	6	5	7	7	



支部活動のページ

2006年度一般会計予算書

● 2006年4月1日～2007年3月31日

日本野鳥の会 三重県支部

● 上段=予算、中段=注釈、下段=2005年度実績

【】収入の部 ○一般会計

支部会費	740,000
	370名 * 2,000円
	362,000
受取寄付金	0
	15,900
受取補助金	0
	0
受取利息	40
	18,439
雑収入	20,000
	広告料 20,000円
	20,600
① 収入合計	760,040

○特別会計

販売事業		30,000
動植物調査	300,000*15%	60,000
ガンカモ	367,500*15%	55,125
鳥獣保護	420,000*15%	63,000
オオタカ	950,000*15%	142,500
② 収益合計		350,625

③ 総収入合計	1,110,665
---------	-----------

【】支出の部

	総会費	理事会費	事務局費	支部活動費	支部報費	対外費	研修費	部長会費	合計
通信費	49,000	8,000	160,000	50,000	180,000	0	0	0	447,000
	47,105	7,550	156,974	43,451	131,264	0	0	0	386,344
印刷費	4,000	1,000	15,000	35,000	380,000	0	0	0	435,000
					4回 (50号記念号会)				
消耗品費	2,290	410	12,403	72,951	140,406	0	0	0	228,460
	0	0	11,182	62,193	36,800	0	0	0	110,175
会場費	15,000	6,000	4,000	15,000	5,000	0	0	2,500	47,500
				野鳥講座・4回					
会議費	15,120	5,470	3,150	12,220	5,000	0	0	0	40,960
	0	0	0	25,000	0	0	0	0	25,000
				親睦会 地区会					
	0	0	0	4,919	0	0	0	0	4,919
旅費・宿泊費	400	34,000	500	32,000	10,000	100,000	10,000	8,000	194,900
						中部ブロック 密対連シンポ			
	400	34,000	300	32,620	0	84,060	7,720	0	159,100
講師謝礼費	0	0	0	150,000	30,000	0	0	0	180,000
				チュウヒサミット	原稿料				
	0	0	0	5,000	0	0	0	0	5,000
交際費	0	0	6,000	0	0	10,000	0	0	16,000
	0	0	6,000	0	0	0	0	0	6,000
図書費	0	0	5,000	0	0	0	0	0	5,000
	0	0	5,000	0	0	0	0	0	5,000
諸会費	0	0	0	0	0	55,000	50,000	0	105,000
	0	0	0	0	0	54,800	52,000	0	106,800
雑費	0	0	4,000	500	1,000	500	500	0	6,500
	10	0	4,394	385	996	472	262	0	6,519
一般予算合計	68,400	49,000	204,500	327,500	661,000	165,500	60,500	10,500	④ 1,546,900

● 支部活動費……企画部・保護部・研究部・保護活動・地区活動

● 対外費……中部ブロック・密対連・干潟を守る日・野生ネット

差引収益	③ - ④	▲ 436,235
特別会計 費の場合	① - ④	▲ 786,860



理事会報告

事務局

第2回（2005年11月6日）出席者14名

（事務局）

○理事の辞任：中村理事（企画部長）より辞意表明があった。当面の間、企画部メンバーとともに事務局で引き継いで行っていく。

○支部役員：委員についても「三重県支部規則」に明文化していくこととする。

○支部メーリングリストへの参加：現在、主として支部運営に関する事務連絡用として活用している。出来るだけ多くの方の参加をお願いしたい。

（保護部）

○木曾岬干拓地開発計画：野鳥の会本部組織との連携を高め、他自然保護団体等の協力を視野に入れながら、引き続き対策検討し、保護部を中心として運動を進める。

○風力発電：現在伊勢志摩地区でも建設計画が具体化。当地は「国立公園『普通地域』」であり法規制は困難。全国的に拡大傾向であり、野鳥の会本部へ問題提起する。

○五主海岸カイト問題：昨年同様、関係者（専門店）を訪問し説明を行うとともに、文書により「お願い」をする。

○その他保護部関連事項：「鳥類生息地調査用紙」についてフォーマット及び記入例（別紙）を作成した。「野鳥情報収集」について、「探鳥会の鳥合わせ結果のDB化（本部施策）」とは別扱いとする。

（編集部）

○支部報「しろちどり」の発行時期見直し：都合により『50号』より、4・7・10・1月とする。

○編集担当の見直しについて：編集作業の負担が大きいのであれば、紙面の簡素化を図る。他地区からも協力する。次期役員交代時期（H19年度から）にあわせ再検討する。

（企画部）

○自然観察指導員講習会への参加派遣：2名参加した。

○来年度行事計画のためのアンケート、年末交流会の実施：

○探鳥会報告書の書式変更：従来の書式に別紙「探鳥会チェックリスト」を加える。（DB化対応のため）

（研究部）

○ガン・カモ調査：現在行っている調査員宛、「今年度も引き続いて調査が可能かどうか」の意向確認調査を実施する。

第3回（2006年3月12日）出席者11名

（事務局）

○地区編成について：地区区分は5地区のまま継続する。ただし、嬉野町は津地区だったが、合併により松阪地区に入れる。

○来年度からの体制について：従来どおり。ただし、津地区の西浦が理事を辞任し、石原が理事に就任。

臨時（2006年3月21日）出席者13名

○鳥羽市行者山における風力発電（風車）建設問題について

会の方針は一貫しており、環境省へ出した方針を会の総意であることを改めて確認した。

○高橋副支部長は、会の方針に反した意見を公表した責任をとり、自ら理事を辞任された。

○来年度の体制は、副支部長1名とし新たに選出しない。

支部活動の記録（2月～5月）

事務局まとめ

2/10 鳥羽市行者山風力発電について意見書提出

2/17 河川整備（佐奈川）のため、国土交通省と現地確認

2/17 事務局会議

3/12 第3回理事会



支部活動のページ

- 3/21 臨時理事会
- 3/22 環境省へ鳥羽行者山風力発電について意見書提出
- 3 県委託事業報告書作成・提出
- 3 年度末のため決算作業
- 4/5 カイト業者に対し、愛好者に協力依頼 チラシの配布を依頼
- 4/10 支部報しろちどり第50号発行・発送作業
- 4/13 緊急アピール探鳥会下見
- 4/23 環境省へ緊急探鳥会報告書を送付
- 4/25 県委託調査事業・入札
- 4/26 三重県環境学習情報センターで「会の活動」を展示
- 4/27 支部長ら3名が鳥羽風力発電問題で環境省へ
- 5/4 チラシ印刷作業
- 5/6 密猟パトロール(南勢地区)
- 5/7 鳥羽風力発電について経済産業省・NEDOへ意見書提出
- 5/10 案内人研修会打ち合わせ
- 5/11 専門家から猛禽類調査の指導を受ける(保護部)
- 5/12 五主海岸における県の「漁場環境保全創造事業」について現地説明会
- 5/23 会計監査
- 5/23 中部近畿カワウ広域協議会第1回総会へ支部長が出席
- 5/24 尾鷲市元須賀利指定猟法禁止区域の指定に係る意見書の提出
- 5/28 2006年度総会・特別野鳥講座
- 5/31 三重県環境学習情報センターへ 展示撤去

● これからの予定(6月～7月)

- 6/5 津市中央公民館へリーダー派遣
- 6/24～25 チュウヒサミット
- 6 野鳥販売実態調査の実施・密猟パトロール

	取扱商品
	フィールドスコープ 双眼鏡(小型・大型) 天体望遠鏡 カメラ(新品・中古) その他光学製品各種
	取扱メーカー
KOWA・NIKON・FUJINON MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他	
中部地区最大の光学製品専門店	
TELESCOPE CENTER EYEBELL	
テレスコープセンターアイベル(株式会社アイベル) 〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119 定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00～19:00 ホームページ http://www.eyebell.com メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc	



ふあるこおばちゃんの 今日も鳥日和

その10



ウグイスを凝視している？
ソウジチヨウ。あちこちでヤエ
ズリが…。カラーではないと、か
れいも何ともないかな？

中岳への稜線から北岳山頂を
振り返る。ササの林床に、ブナ、
イヌブナなどが散在。

小坂里香（度会郡度会町）



オオアカゲラのドラミングをバ
ックに、目の前で長いことヤエ
ずってくれたキビタキ。新緑が
似合う鳥だどつくづく思う。

カメウを持っていないと、きに限つ
て近くでやえざるミソサザイ。
小々な体で、よくもあんなに大き
な声が出るもんです。

シオジの原生林を求めて 5月5日(金)

GWを利用して、郷里が誇る霊山・英彦山に登ってみた。英彦山は全
国三大修験道のひとつ。コノハスクなど深山の夏鳥はじめ、北九州の深
鳥ポイントとしても名高い。今回は甥姪も連れ、家族で高住神社から北
岳をへて、上宮のある中岳（1200メートル）を目指した。ちよっとし
た銀場などもあって、けっこう険しいコースだ。沢沿いの登山道ではミ
ソサザイ、オオルリ、キビタキの声が響き渡り、キセキレイが崖に営巣
中。路傍にはハルトラノオなどの山野草が。目的のひとつ、シオジ（ワク
セイ科）の原生林は葉っぱの展開前で残念だったが、稜線にはブナの巨
木もちらほら…。
あまりのすばらしさに、実家にいた頃、山にも鳥にも植物にも興味が
なかつたのが惜しまれる。近くだったら、毎週でも登りたい山だなあ。



野 鳥 記 録

種名	個体数	記録日	場所(通称など)	記録者	メモ
ツバメ	3	2006/3/7	紀宝町井田上野	清水 勝海	初認
ヤツガシラ	1	2006/3/25	河芸町田中川河口	平井 正志	
サシバ	6	2006/4/4	津市白山町南家城 (家城ライン)	石原 宏	春の渡り
シマアジ	6	2006/4/13	熊野市有馬町	中井 節二	♂2、♀4
ハイロチュウヒ	1	2006/4/15	木曾岬町 (木曾岬干拓地)	近藤義孝	♀
ハマヒバリ	1	2006/4/16	御浜町木水田	中井 節二	成鳥
ギンムクドリ	1	2006/4/21	熊野市有馬町水田	中井 節二	成鳥♀
ノゴマ	1	2006/4/27	津市安濃町清水	岡 八智子	♂
コマドリ	3	2006/4/29	菰野町(御在所岳)	安藤 宣朗	初認(成鳥♂)
コルリ	1	2006/4/29	菰野町(御在所岳)	安藤 宣朗	初認
センダイムシクイ	6	2006/5/1	津市借楽公園	石原 宏	春の渡り
サルハマシギ	1	2006/5/3	熊野市有馬町水田	中井 節二	成鳥夏羽
キアシシギ	1	2006/5/5	御浜町阿田和 (尾呂志川河口)	清水 勝海	両足上部に標識
サシバ	7	2006/5/8	津市安濃町安部池	川口 久美他	春の渡り、東へ
マミジロ	1	2006/5/8	亀山市野登山山頂	石原 宏	春の渡り(♂)
キアシシギ	1	2006/5/21	玉城町水田	西村 泉	左足に水色フラッグ

野鳥記録によせて

今回は春の渡りの観察がいくつかありました。

ノゴマは秋の渡りで県内でもいくつかの報告がありますが、春の渡りは比較的めずらしいと思われます。

サシバの春の渡りは当然観察されるのですが、これまであまり注目されず、ルートもわかっていません。今後の観察を期待します。

マミジロはこれまで、秋の渡りに青山高原を通過することが知られていましたが、春の渡りの観察は初めてです。むろん県内での繁殖の記録もありません。(保護部)



サルハマシギ (熊野市) (夏羽)(上)
ハマヒバリ (御浜町) (左)
共に中井節二撮影



探鳥会報告

2006年2月～2006年4月

● 五十鈴公園探鳥会

2006年2月4日(土) 9:30～11:30

伊勢市五十鈴公園

山田昭子・吉居瑞穂

参加者15人(会員14人、会員外1人)

カイツブリ、カワウ、ミサゴ、トビ、ノスリ、キジバト、ホオジロ、コゲラ、キセキレイ、モズ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、シジュウガラ、メジロ、アオジ、イカル、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。

計 20種

例年より冬鳥が少なく寂しかったがエナガの群れやイカルがじっくりと観察できた。

● 神戸の里山探鳥会

2006年2月5日(日) 9:00～11:50

津市神戸

橋本富三・西浦克征

参加者20人(会員11人、会員外9人)

カワウ、アオサギ、ノスリ、ハヤブサ、キジ、キジバト、コゲラ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、エナガ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。

計 26種

朝、小雪の舞う寒い日で、最初は鳥がすくなかったが、陽が差して暖かくなってきた頃カラ類の混群に混じってベニマシコが現れた。そこが中勢バイパスの建設予定地内であったのは皮肉であった。最後にハヤブサやノスリの帆翔が見られ参加者に喜んでもらった。

● 木曾三川探鳥会

2006年2月11日(土)

桑名市、岐阜県海津市、愛知県愛西市(旧立田村)(揖斐、長良、木曾川)

近藤義孝 参加者10名

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、コハクチョウ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミサゴ、ノスリ、チュウビ、ハヤブサ、イカルチドリ、シロチドリ、ケリ、ハマシギ、タシギ、ユリカモメ、キジバト、ハクセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、オオ

ジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。 計 43種

冬の木曾三川はいつもたくさんの種類が観察できる。今年はコハクチョウがたくさん飛来し、今日も108羽観察できた。

● 海蔵川探鳥会

2006年2月14日(火) 9:40～12:00

四日市市西坂部町

尾畑玲子・高 和義

参加者13人(会員11人、会員外2人)

カイツブリ(4)、カワウ(4)、ゴイサギ(1)、アオサギ(1)、カルガモ(24)、コガモ(1)、オオタカ(2)、キジ(1)、バン(4)、キジバト(5)、カワセミ(2)、ヒバリ(1)、キセキレイ(2)、ハクセキレイ(11)、セグロセキレイ(3)、ヒヨドリ(9)、モズ(1)、ツグミ(2)、ウグイス(2)、ホオジロ(7)、アオジ(2)、カワラヒワ(4)、スズメ(4)、ムクドリ(6)、ハシボソガラス(4)、ドバト。

計 25種

昨年秋以来カルガモが増え40羽前後を数える。その中で胸の赤茶色の固体を発見、よく見ると頭部は緑色がまじっている。どうやらカルガモとマガモの交雑種?あるいは以前この川のすぐ近くでアイガモ農法を行っていたのでその子孫?あれこれ考えさせてくれる珍鳥であった。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2006年2月26日(日)

(共催:愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地、愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者10名

カイツブリ(1)、ハジロカイツブリ(1)、カワウ(30)、ダイサギ(1)、コサギ(2)、アオサギ(1)、カルガモ(40)、コガモ(18)、オカヨシガモ(15)、ヒドリガモ(2)、ハシビロカモ(8)、ホシハジロ(8)、キンクロハジロ(8)、ミサゴ(2)、オオバン(1)、ケリ(20)、イソシギ(3)、ユリカモメ(5)、オオセグロカモメ(1)、カモメ(4)、キジバト(15)、ヒバリ(20)、ハクセキレイ(2)、タヒバリ(20)、ヒヨドリ(10)、ツグミ(10)、ホオジロ(1)、スズメ(30)、ムクドリ(10)、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(15)、ドバト(6)。

計 32種

あいにくの雨のため、車の中からの観察が多かった。大雨のため、遠くは見えず、猛禽類もほとんどみえなかった。



探鳥会報告

● 宮川中流探鳥会

2006年3月3日(金) 9:30～11:30

度会郡度会町宮リバー公園周辺

小坂里香・山田昭子

参加者13人(会員8人、会員外5人)

カイツブリ(1)、カワウ(10)、カワアイサ(2)、トビ(3)、イカルチドリ(2)、イソシギ(1)、キジバト(3)、ツバメ(2)、イワツバメ(6)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(1)、セグロセキレイ(3)、ヒヨドリ(5)、モズ(3)、ツグミ(10)、メジロ(5)、ホオジロ(3)、カワラヒワ(20)、シメ(4)、スズメ(2)、ムクドリ(20)、ハシボソガラス(3)、ハシブトガラス(3)。
計 23種

風は冷たかったが身近な鳥がじっくり見られてよかった。この冬少なかったツグミがたくさんいた。モズのペアの行動に春を感じた。目玉のシメが藪から出てこなかったのとヤマセミが出てこなかったのは残念だが予想外のカワアイサには驚いた。余興の野鳥ビンゴも好評だった。

● 石垣池探鳥会

2006年3月5日(日) 10:00～12:00

鈴鹿市 西玉垣町石垣池

市川雄二・市川美代子

参加者19名(会員10名、会員外9名)

カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、オオタカ、オオバン、アオジ、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、カ



キツネノポタン

しろちどり51号

ワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス。

計 28種

オオタカがいつもの擬木に長くいてくれたので、会員外の人にも初めてだと感激されていました。

● 余野公園探鳥会

2006年3月5日(日) 10:00～13:00

伊賀市 柘植町余野 余野公園

塗矢尋一 参加者8人

(会員6人 会員外2人)

キジバト(4)、コゲラ(2)、ハクセキレイ(6)、セグロセキレイ(8)、ビンズイ(4)、ヒヨドリ(28)、ツグミ(3)、ウグイス(8)、ヤマガラ(2)、シジュウカラ(4)、メジロ(3)、ホオジロ(6)、カワラヒワ(4)、スズメ(25)、ハシボソガラス(6)。

計 15種

今までは1月または2月に探鳥会を実施していたが今回は3月にどれだけの鳥がいるのか試してみたが、やはり3月はおそすぎたのかな。探鳥会の時期はよく考えるべきであった。

● 五十鈴公園探鳥会

2006年3月11日(土) 9:30～11:30

伊勢市 宇治館町 五十鈴公園

山田昭子・吉居瑞穂

参加者28人(会員23人、会員外5人)

カイツブリ、カワウ、コサギ、アオサギ、カルガモ、トビ、バン、イソシギ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、トラツグミ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。

計 30種

前日の雨が上がりポカポカの春の陽気で鳥達もゆったりと姿を見せてくれた。心配だった冬鳥もやっと登場し、ひと安心だ。子供の参加が8名もありうれしい探鳥会だった。

● 丹生探鳥会

2006年3月24日(金) 9:30～11:30

多気郡多気町丹生

中村洋子・竹川華子

参加者13人(会員12人、会員外1人)

トビ、キジバト、カワセミ、ツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウ

探鳥会報告



カラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

計 17種

下見のとき(20日)はツグミが沢山いたが今日は2羽しか見られませんでした。まだ渡りには早いし、どこへ行ったのでしょうか。鳥以外に丹生大師の山門、立梅用水、メダカ池、水銀坑道などを見てもらった。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2006年3月26日(日)

(共催:愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者21名

カイツブリ(20)、カワウ(50)、ダイサギ(1)、アオサギ(2)、マガモ(3)、カルガモ(200)、コガモ(50)、オカヨシガモ(32)、ハシビロガモ(11)、ホシハジロ(6)、キンクロハジロ(4)、ミサゴ(4)、トビ(2)、オオタカ(2)、ハイタカ(2)、ノスリ(3)、チュウヒ(2)、ハヤブサ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(15)、ケリ(20)、タゲリ(10)、イソシギ(1)、オオセグロカモメ(1)、カモメ(3)、キジバト(6)、ヒバリ(10)、ハクセキレイ(4)、タヒバリ(2)、ヒヨドリ(6)、モズ(1)、ツグミ(6)、ホオジロ(4)、カワラヒワ(5)、スズメ(100)、ムクドリ(15)、ハシボソガラス(130)、ハシブトガラス(70)、ドバト(70)。

計 39種

集合場所の弥富野鳥園にシメがいた。最初に行った池のヨシにアリスイが止まっていた。木曾岬干拓地を白いチュウヒの雄(大陸型)が飛んでいた。

● 松阪ベルファーム探鳥会

2006年4月8日(土) 10:00~11:45

松阪市 伊勢寺町

中村洋子 小野新子 参加者20人

(会員18人、会員外2人)

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、オオバン、キジバト、ツバメ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

計 16種

風が強く吹いていたので、ため池を一周する予定でしたが出来ませんでした。カモは1月頃には600羽いたが約5分の1に減っていた。渡りの準備(移動)しているのかな?

● 緊急アピール(鳥羽行者山)探鳥会

2006年4月22日(土) 9:30~11:30

鳥羽市 船津町

西村 泉・竹林 康 参加者20人

(会員15人、会員外5人)

トビ、オオタカ、アマツバメ、コゲラ、ヒヨドリ、シロハラ、ウグイス、キビタキ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、ハシブトガラス。

計 15種

クリーンなエネルギーといわれる風力発電だが行者山に風車が建設されるといかに環境破壊であるか参加者に訴えた。新聞社も2社同行し探鳥会終了後であるが絶滅が心配されるクマタカが出現し朝日新聞に大きく掲載された。

● 木曾岬干拓探鳥会

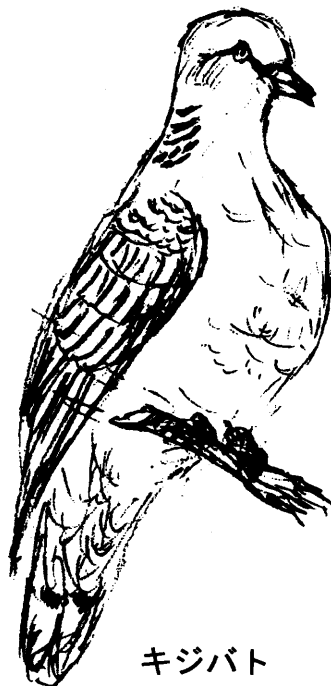
2006年4月23日(日) 9:00~11:30

(共催:愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

村田芳雄 参加者7人

カイツブリ(2)、カワウ(50)、ダイサギ(2)、コサギ(3)、アオサギ(3)、カルガモ(3)、コガモ(8)、ヨシガモ(2)、キンクロハジロ(1)、ノスリ(1)、チュウヒ(2)、キジ(15)、コチドリ(2)、ケリ(30)、



キジバト



探鳥会報告

クサシギ (2)、イソシギ (1)、チュウシャクシギ (12)、ユリカモメ (1)、キジバト (7)、アマツバメ (1)、カワセミ (1)、ヒバリ (10)、ツバメ (10)、ハクセキレイ (3)、タヒバリ (1)、ヒヨドリ (2)、ノビタキ (1)、ツグミ (20)、セッカ (5)、ホオジロ (1)、カワラヒワ (4)、スズメ (30)、ムクドリ (20)、ハシボソガラス (50)、ハシブトガラス (50)、ドバト (80)。
計 36 種

ほとんどカモがいなくなった運河にヨシガモの 1 番 (つがい) がいて、きれいな羽の色彩を堪能することができた。またノビタキが近くに止まってくれた。チュウヒは 2 羽現れた。

● 県民の森探鳥会

2006 年 4 月 29 日 (土) 9:30 ~ 12:10

四日市市三重県民の森

矢田栄史・辻 秀之

参加者 72 人 (会員 24 人、会員外 48 人)

コジュケイ、キジバト、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、ビンズイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、シロ

ハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

計 28 種

鳥はオオルリが囀る姿を観察できた。他にも種類は出ているが姿はなかなか見えない。曇り空のせいか昆虫 (蝶やトンボ) は観察できなかつた。

● 五十鈴川早朝探鳥会

2006 年 4 月 30 日 (日) 6:00 ~ 9:00

伊勢市五十鈴川県道沿い

山田昭子・竹林 康

参加者 23 人 (会員 22 人、会員外 1 人)

アオサギ、カルガモ、イカルチドリ、キジバト、カワセミ、アオゲラ、コゲラ、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、イソヒヨドリ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。 計 25 種

早朝にもかかわらず多数の参加者がありにぎやかだった。キビタキやオオルリなど美しい声を聞くことができ、早起きの甲斐があった。

編集後記

今年の春は低温がつづいている。野菜の値上がりは新聞に取り上げられるが、野鳥はどうなっているのだろうか。昆虫類が少なく、繁殖に影響が出るのではないだろうか？そういえばアオバヅクの声を書かないという話があちこちから聞こえる。私の家でも今年はまだ鳴声を聞いていない。しかし、野鳥の定量的な調査はだれもやっていない。目の前の経済さえ良ければ、環境は二の次といった考えはもう通用しないはずであるが、環境を監視する人はほとんどいない。それに金も人も出さない。経済産業省や国土交通省の予算に比べると環境省の予算は微々たるものである。また予算があっても野鳥など環境を監視できる能力のある人が育っていない。最近カワウの調査をするといっているが、行政当局は趣味団体である野鳥の会におんぶである。(MH)

しろちどり 51号

2006 年 7 月 1 日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 平井正志

カット： 平井正志

編集： 平井正志 514-2325

津市安濃町田端上野 910-49

発行所： 日本野鳥の会三重県支部

杉浦邦彦方

516-0026 伊勢市宇治浦田 2 丁目 9-4

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>

印刷：伊藤印刷株式会社